

一年の締めくくりである十二月も下旬となりました。年の瀬といえば、整理・整頓・後始末を思い浮かべる人も多いでしょう。

A社長はかつて、この時期になるといつも憂鬱になっていました。社内と家庭内の大掃除が待っているからです。整理・整頓が不得手なA社長は、物を溜めるクセがありました。とりわけ職場のデスクには、書類や書籍が山のように積んであります。社員からは「社長、もう少しデスクの上の書類や書籍を整理したらいかがですか」「社長は主要塞の中で、仕事をされるのが好きなんです」「など、本音とも冗談ともいえない言葉が飛んでくるほどでした。

それに対してA社長も「書類が沢山積んであると仕事をしている気になるんだよ」「書籍はいつか読もうと思っているんだよ。目の前にないとそのいつかがやってこないだろう」などと応戦し、片づける意欲や気配がまるでありません。

しかし、周囲の目や世間体もあるので、一年が終わる十二月だけは、ため息をつきながら、申しわけ程度に身の回りの整理整頓を繰り返すということが、起業してからの二十年の通例でした。

ところが、そのようなA社長の職場環境に劇的な変化が起こりました。そのきっかけは、倫理法人会が主催する「経営者セミナーングセミナー」に参加し、終了後の食事で、講師からアドバイスを受けた時のことです。

A社長の席は、講師と向かい合わせだったため、「社員ともっと仲良くするには、どうすればよいですか？ たまに馬鹿にされているような気がします」と何となく相談しました。講師からは「馬鹿にされているような、ではなく、馬鹿にされて



## 後始末名人となり 風通しをよくする

いるんですよ」との言葉が返ってきました。

一瞬、A社長はムツとしましたが、続けて講師が、「社内の雰囲気はどうなっていますか？ 普段の社員の表情はご覧になれていますか？」と質問をしてきたのです。

A社長は凶星を突かれたのか、思わず「椅子に座るとデスクに書類や書籍が山積みになっているので社員の表情は見えません。いや気にしたことありませんよ」と即答したのでした。

すると講師から「それならば、解決するのは簡単ですよ。まずは、整理・整頓を心がけ、後始末名人を目指したらいかがですか。そして、①勇気を出して捨てること。②また使うかも知れないと思うものを捨てること。③捨てる際には「これまで私のために働いてくれてありがとう」という思いを持つことです」とアドバイスされたのです。

講師の話聞き、目からウロコが落ちたA社長は、早速、三つの心構えを持って、後始末の実践に取り組みました。一心に片づけると、瞬間に職場環境が変わっていききました。

一つ目は、自分のデスク周りが整い、きれいになったことで周囲の景色が変わり、視線の先に社員の表情が見えるようになったことです。

二つ目は、社員の笑っている顔を見ると自分も嬉しくなり、困った表情をしている時には声をかけ、一緒に問題解決を図るようになったことです。それにより、社員との信頼関係が深まったことは言うまでもありません。

苦手であった後始末に対して、今では全くその意識がなくなりました。そして社内はもとより家庭内でも積極的に後始末ができるようになり、社員、家族ともに、意思の疎通がよくなったのです。